

5年C組	元氣もりもり 冬をあたたく	小竹 和美
-------------	--------------------------	--------------

1 単元について

家庭科では生活の変化に伴って学習に環境教育はじめ色々な内容が盛り込まれているが、従来の衣食住の比重が減ったわけではなく、総合的に関連付けられて学習する事になっている。子どもたちの家庭生活の実態は時代や社会の変化とともに多様なものになっているため、家庭科の学習が個別のものになりがちであったり、共通の学習の意味が薄れるように思われがちであるが、決してそうではないと考える。子どもたちの家庭生活が多様だからこそ、その実態を踏まえつつ、集団で共通に学ぶ学習を通して、どの子どもにも家庭生活を健康で豊かなものにするための資質や能力を育むことが大切である。

それは、家庭生活に関心を持ち、事実認識をすることと、様々な生活事象の根底にある原理・原則について科学的に追究し理解していくことである。また、より良い生活を目指し、生活の知恵や文化を伝えるとともに新たに創造し、生活者として自立していくことである。そして、家族を中心とした人間関係を調整し、協力して生活するという共生の生活観を子どもなりにもつことが、社会の変化とともにますます大切なことであると考えている。

家庭生活は衣食住の生活が別々にあるのではなく、家族と関わりながら総合的に営まれているものである。子どもたちが生活を実感し、自ら問題意識をもって学習できるように、基礎的・基本的な技能・知識などが日常生活に根ざしたものであり、役立っていくという思いをもたせたい。家族の団欒や家事を子どもとともにやることは家族の絆を深めるだけでなく、子どもが大人になり新しい家族を構成していくときの家族を大切に想う気持ちを自然につくものである。

5年生の子どもたちの普段の様子から、まだまだ家では自分の事だけで精一杯で、家の仕事を任せられるという事には程遠いと考えている。そこで、家での実践の計画とともに、実際にめんどくでもやってみる。そして、家族といっしょにやったり、家族のために自分ができる事を認めてもらいながら自分のできる事を増やし、自信をつける。そうすることで、保護される状態から自立に向かって自分も家族の一員としての自覚が生まれ、家族とともに生きる実感がわいてくると考える。そして、家族の一言は大きな励みであり、その場での言葉かけだけでなく、計画と実践のプリント等に家族の言葉欄をもうけ子どもの目に触れ家族の思いが届くようにしたい。色々な形で、家族が互いに気持ちを伝え合う事の大切さを知って欲しいと考える。

また、男女参画社会を生きていくであろうこれからの子どもたちにとって、何より大切な事は自立に向けての基礎をしっかりと築き、健康で明るい前向きな生活を送れるということである。この子どもたちも7・8年後には家を離れて下宿したり、親から自立したときに一番に重要となる家事は食事作りであろう。昨今、外食やコンビニ・出来合いの弁当などで済

ます事になりがちであるが、健康面や経済面から言っても手作りを見なおし、自分の健康管理はしっかりとやらせたいものである。バランスのよい健康を考えた食事作りをするための基礎的な知識と技能をぜひ身につけさせたい。そして、自分が自立しその立場になったとき、気軽に楽しんで実践できるように、食事作りの工夫や喜びなど味わわせたい。それには、学校での学習の実践から家での実践までを計画する事が必要であろう。

週に一時間しかない家庭科の授業で、子どもにどれだけのことができるかを考えたとき、学校で計画を立て、家に持ち帰って実践していく。そして、仕事を体験する事で、自分の生活が見え、家庭の仕事の手順も分かってくると考えた。その中から、問題が見えたり、課題が生まれたらと思っている。

家族の健康や楽しみという点からも家庭生活の仕事の中心となるであろう食については、子どもの興味もあり、学習でも最初から取り上げてきている。一学期では家族の触れ合いを考えた「お茶の入れ方とイチゴ大福作り」（4月）や、調理の基礎となる「ご飯と味噌汁作り」（5月）をした。二学期には、給食の栄養士との連携で3つの食品群を考えたバランスの良い「朝食献立を考えよう」（10月）を学習している。そして、「冬をあたたかく」という工夫の1つとして「鍋料理」を今回の単元の中に取り入れ、栄養のバランスを考えた食材であり、なおかつ安く買うを意識した金銭学習を取り入れ、食材から自分たちで買い無駄なく使い切るというエコクッキングを意識した。「鍋料理」はこれからの冬場には欠かせない食べ物であり、関西は関東に比べてたくさんの種類もあり、家庭での出てくる頻度も高いと言われる。また、調理方法も簡単であり、1つ学習すれば、冬本番はこれからということで、家で作る機会も増え、子どもが自分から進んで調理に参加する事もできる。

それとともに、もう一つ、クリスマスプレゼントを家族には内緒で図工の時間などを利用して作っていくことにしている。

2 実践の考察

子どもたちが4月から家庭科学習で取り組んできた学習をどれだけ自分の生活に活かしているか、あるいは活かしていけるかを考え、自分の生活を自分で少しずつでも取り組んで行こうという意識をもたせたいと考えた。4月から学習した事を思い出す中で、それを家でもう一度やってみたり、それを応用してしたことがあるかや、やろうと思えばできることは何かなどを見直しさせた。

本単元の第1時で5年生になって初めて習い始めた子どもたちの家庭科学習での印象深いものを出し合った中で、「ほっとタイム」として1番最初に作った「いちご大福とお茶の入れ方」が多く出た。ジャガイモをつぶしてアンを作った時に薄皮が上手くくっつかず離れてしまった事や、砂糖の加減で失敗したことを楽しそうに話した。また、「母の日」に間に合うようにと5月に「味噌汁とごはん」の実習をしたことも、いちご大福の時と違って大成功に終わった喜びが出された。そして、小物作りに、はまってたくさん作ったことも挙げられた。

その中で家で実践した事は、いちご大福をもう一度作ってみて上手く作ったり、チョコレ

ートの中に入れてチョコレート大福を作ったりとおやつ作りを楽しんだり、味噌汁・おかずなどの料理に挑戦した子が以外に多く、19人いたことが分かった。また、小物作りに凝って夏休みに袋を作ったり、女子の中にはワンピースまで自分で縫った子もいる。ボタンつけやミシン縫い、玉結びなどを入れると16人が家で実践した。しかし、まったく何もやっていない子どもも4人いた。

毎日家でやっている仕事についてたずねると、たくさん出た中で子どもたちのすごい気持ちや伝わったのは、「掃除機をかける」(△着目児)と「妹2人の世話いろいろ」の時であったし、プリントの感想にも出ている。そして、「くつならべ」や「お母さんにマッサージ・つぼ押し」が出された時も「ああ、そんなこともできるのか」とみんなの反応であった。素直に感心し、自分ももっとやってみようという雰囲気がかもし出された授業となった。

毎日やる家の仕事ベスト4

N01	ふろあらい	12人
N02	新聞とり	8人
N03	台ふき	7人
N04	夕食手伝い	6人
N04	くつならべ	6人
N04	犬など生き物の世話	6人

時々やたまにやる仕事ベスト4

N01	夕食手伝い	13人
N02	食器洗い	8人
N03	そうじ	5人
N03	ふろあらい	5人
N04	新聞とり	4人
N04	台ふき	4人

次に「元気もりもりになるように、体も心も冬をあたたくしよう」と投げかけた中で、料理とプレゼント作りを実践する事に決まった。家族への思いを伝えるプレゼント作りは時間の都合で図画工作の時間を利用する事にして、料理は「味噌汁・シチュー・鍋・スープなどなど」なかなか食べる事には詳しく色々出たが3つの食品群が入れられるし冬には家でもよく出ると言う理由で鍋料理に決定。早速、班で作りたいものを決めて、学校近くのスーパーマーケットに食材の値段を調べに各自メモプリントを持って出た。作ろうと思う鍋料理の中に何を入れるかそれぞれの違いがあるからで各自調べさせた。また、安そうな食材や店に行ってから気のついた食材も調べておくようにとアドバイスしてから出した。

1班の○(着目児)は調べてきた中に河豚・鱈などの魚類の食材があったが、他の子どもとの話し合いの結果出てきた班で作る鍋料理の食材には抜け落ちた。また、7班は当初「すき焼きを作ろう」と決めて食材を調べに行ったが、戻ってからの話し合いでは「からいキムチ鍋」と変更している。食材が少なすぎるとか、牛肉が高すぎるとかが問題になっていた。日頃、何気なく食べていたが食材によっては、かなり値段の張るものがあり、予定している1人200円から250円ぐらいという予算内に入らなかったのである。同じ食材でも、値段に差があったり、その日に特売になっていたり、値段調べの日と実際に買い出しに行ってみてきた時とは、2回見に行っただけの成果はあり、予定より安く買い物をしたり、予定外

に安いので野菜の種類を増やしたりと班での学びは大きかった。学校で鍋料理が上手くできた話を家でしたら作ってくれと言われて早速作ってみたと子どもの作文に書かれていたり、保護者の感想や話の中にも食に興味を持ちいろいろと作るようになったことが出された。家での仕事を低学年のころに喜んでやっていたのに、高学年になるにつれ、親がやらさなくなってしまうと反省し、家事をすることの大切さに気づいたと話してくれた保護者もいた。鍋料理は、簡単にできるが工夫次第でバラエティに富んだ何種類もの味があり、3つの食品群がバランスよく入るので、まだまだ奥の深いものである。1つの料理をきっかけにどんどん興味を広げていってほしいと思う。

着目児 ○さん

共働きの両親に代わっておばあちゃんが小さい時から面倒をみている。授業参観にも必ずおばあちゃんが来てくれるほどの母親も認めるおばあちゃんっ子であり、また一味違う情報が出て来たりする。魚類を食材に書いていた子どもはまれであり、何か意見が出てくればと思っていたが、その事には触れなかった。しかし、1班ではミンチから団子作りをする事になっているので他の班のできた肉団子を買う予定とは違うことが本時で出された。それに、寄せ鍋を作ったが、食材の野菜がかなり余ったのと思ったより食べきれなかったので、買う量をもっと考えたいと反省に出された。

3 今後の課題と展望

平成14年度と15年度は、家庭生活における食について取り組み、子どもの意欲を高め、日常生活に生かしていくように保護者の方の励ましや意見を子どもに見える形にしていこうと考えて実践してきた。「まず、やってみる」から「できる・わかる」へという本年度の家庭科のテーマのなかで、食を中心に研究を進めてきたので、学校で取り組む事によって家でも意欲的に実践し、細かいコツや知識を家で保護者に教えていただく事も多かった。そして、学校で実践したことをもう一度、母の日や普段の日にも自分で味噌汁を作ってご飯を炊いたり、家庭学習で朝食を作ったり鍋料理を作ったりと、思ったより簡単にできた自信をつけ家で実行した子どもも多かった。その自信と家族の励ましが、家族への思いとなって子どもに返っていくものである。学校で計画を立て実践し、家でも実践していくことは今後とも自分の生活に返す事であり、大切な事であると捉えている。その中で、食以外の領域を中心に実践研究をしていきたい。

4 実践研究テーマの設定

家庭生活の中心食文化を学ぶ事はもちろんであるが、「快い生活空間作り」を実践研究テーマに取り上げ、学校で計画を立て実践し、自分の生活に返し家でも実践していくようにしたいと考えている。身の回りの整とんから学校生活にもかかわって掃除の仕方を具体的に実践する中で、今日的な住環境の見なおしに至るまで住の文化を中心に上げたい。